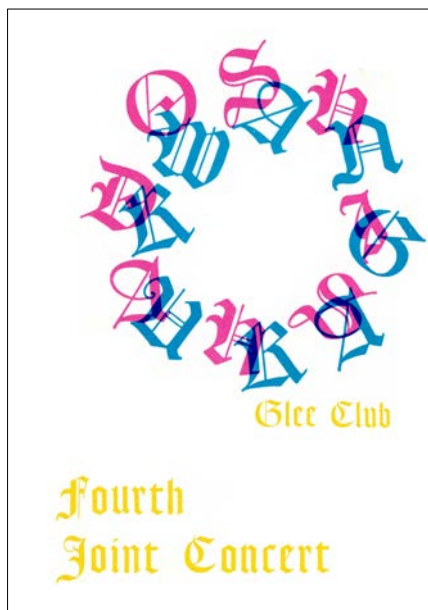


第4回交歓演奏会【1967年(昭和42年)6月16日】大阪フェスティバルホール
(同志社グリークラブ 関西学院グリークラブ)



IV 関西学院グリークラブ

中原中也の詩から	指揮	北村協一
北の海	作詩	中原中也
汚れっちまった悲しみに	作曲	多田武彦
朝鮮女		
雲雀		
六月の雨		
月の光		

組曲「中原中也の詩から」について

多田武彦

中也の詩に接したのは、いまからもう二十年も前のことである。先輩の先生がたと同じように、私も中也の詩に惹かれ、作曲をようと思ひ、いくつかの曲のモチーフだけは、随分前に、もう出来あがっていた。

しかし、「心のなかに、何かジーンとしたものを残して行く中也の詩の深さ」を表現するには、私の技倆は未熟だった。昭和34年、東京コラリヤーズの委嘱により書いた組曲「在りし日の歌」は、確かに好評ではあったが、自分では、曲のむずかしい割に、内容を十分表現し切れなかった、と思っている。

所で、処女作「柳河風俗詩」以降の私の創作活動は、昭和38年、組曲「京都」で芸術祭奨励賞を得て以来、ここ三年間停止していた。それまで一作ごとに、色々な人からの忠告や助言に従って、一步一步技術的水準を上げて行こうとした私は、「京都」を書いた後、「京都」以上の技術的水準の高い組曲は、もう私には書けない、と判断してしまっていた。

ところが、一方では、「多田さんの曲は、一曲ごとに難かしく、親しみにくくなって行く。『柳河風俗詩』や『中勤助の詩から』のような、初心者でも或る程度の練習を積めば歌うことが出来て、しかも、かおりの高い組曲を、いつまでも書き続けて欲しい」という声や手紙が、主に、大学のグリークラブの方々から寄せられていた。

こうした声に応える曲を書くことが、当面の仕事だと思いついた私は、ここ数カ月の間に、組曲を三つ作曲した。すべて、私の持てる力量を駆使した、私として満足のゆく組曲ばかりであるが、その中の一つが、今日、関西学院グリークラブによって演奏される「中原中也の詩から」である。

中也の詩を基にした作曲や演奏に際しては、『中也の、全く追いつめられた人生の中から昇華されて生れ出て行く冷徹なまでに美しい抒情性』を如何にして表現するか、ということが最も大切であり、私は、この一見簡略な手法を用いた組曲の中に、それを十分試みた積りであるが、演奏も、こうした抒情性の表現には抜群の冴えをもつ北村協一氏の指揮と、ここ数年、こうした抒情的表現力に益々磨きのかかって来た関学グリーの名コンビによって行われる機会を得ることが出来たことは、何よりも嬉しい。聴後の忌憚のないご批判を乞う。